

スラヴ=バルカン・フォークロアにおける アレゴリー「死=結婚」

伊 東 一 郎

スラヴ=バルカン・フォークロア、特にその韻文ジャンルに広く共通に見出されるアレゴリーの一つに、死を結婚に擬える特徴的な表現がある。その根底には、民衆の世界観に深く根ざした結婚と死とを通過儀礼として相同的なものとみなす普遍的な感覚がある、と考えられる。しかし、個々のフォークロア・テキストにおいて、それがどのような表現を取るか、死が具体的にどのように、何との結婚として表現されるかは、ジャンルや地域で様々である。本論の目的は、このアレゴリーが、スラヴ=バルカン地域の諸民族のフォークロアにおいて、どのようなジャンルにどのように表現されているかを概観し、その意味を考えることにある。

1. ロシアの兵士の歌における「死=結婚」

ロシア・フォークロアにおいてこの「死=結婚」のアレゴリーが典型的に現れるのは、まず兵士の歌のジャンルである。このジャンルにこのアレゴリーが出現するのは、戦闘の場で常に死に直面している兵士の状況と関係している、と思われる。その場合、瀕死の兵士が、故郷の父母や妻への遺言を馬や鴉などの動物に託し、私は死んだのではなく、結婚したのだ、と伝えてくれ、と語るのが定型的なパターンである。有名な兵士の歌「黒い鴉」«Черный ворон»では、死にゆく兵士が頭上を舞う鴉に次のように遺言を託す。

Черный ворон, черный ворон,	黒い鴉よ、黒い鴉よ
Что ты вьёшься надо мной?	何故私の上を舞い飛ぶのだ？
Ты добычи себе дождёшься,	おまえは自分の獲物を待ち受けているのか？
Черный ворон, я не твой!	黒い鴉よ、私はおまえのものではない！
Что ты когти распускаешь	何故おまえは私の頭上で
Над моею головой?	爪を剥き出すのだ？
Иль добычу себе чаешь?	それとも自分の獲物を狙っているのか？
Черный ворон, я не твой!	黒い鴉よ、私はおまえのものではない！

Завяжу смертельную рану	命に関わる傷を
Подаренным мне платком,	私が妻から貰ったスカーフで縛ろう
А потом с тобой я стану	その後でおまえに
Говорить все об одном.	あることをしっかりと頼みたい
Полети в мою сторонку,	私の故郷へ飛んで行き
Скажи маменьке моей,	私のお母さんに言ってくれ、
Ей скажи, моей любезной,	私の愛しい母さんに告げてくれ、
Что за родину я пал.	私は祖国のために倒れた、と
Отнеси платок кровавый	血染めのスカーフを運んでくれ
К милой любушке моей,	愛する妻のもとへ
Ей скажи, она свободна—	彼女に告げて欲しい、おまえは自由だ、
Я женился да на другой.	私は別の妻と結婚したのだから、と
Взял невесту тиху-скромну	開けた野の茂みのもとで
В чистом поле под кустом,	慎ましい静かな妻を娶ったのだ
Обвенчала была сваха—	婚礼を挙げてくれた仲人女は
Сабля острая моя.	鋭い私のサーベルだ
Калена стрела венчала	鋼の矢が我らの婚礼を挙げてくれた
Нас средь битвы роковой,	運命を決する戦いの最中に
Вижу, смерть моя приходит,	どうやら私の死がやってきた、
Черный ворон, весь я твой.	黒い鴉よ、私はすっかりおまえのもの

[Иванов 1953: 107-108]

このテキストの主人公は既婚の兵士で、自分は結婚したのだ、と語るのは、妻に対してだけである。母親には、祖国のために倒れた、と伝えるように鴉に頼んでいる。そして妻に対して、戦死した自分つまり結婚したのだから、おまえは自由で、再婚できるのだ、という論理の裏づけとしてこのアレゴリーを用いているのである。兵士の結婚相手は「死」そのもののようでもあり、その際ロシア語の「死」смерть がロシア語で女性名詞であることが重要になってくる。結婚を挙げてくれる「鋼の矢」калена стрела も女性名詞であり、女性の結婚介添え人として擬人化されている⁽¹⁾。

ところでこの民謡は、実は1831年にヴェリョーフキン（Н. Веревкин）によって書かれた詩「緑の柳の下に」«Под зеленого ракитой»が民謡化したもので、本来の兵士の歌では、遺言を託すのは、兵士の愛馬である [Гусев 1988: I-52, II-388, 493]。

次のやはり有名な兵士の歌「おお我が草原よ」«Уж ты поле моё»では、瀕死の兵士が愛馬に、故郷に駆け戻り、妻に遺言を伝えてくれ、と頼む。

«Ты скажи жене, что женился я, Что женила меня пуля быстрая, Обвенчала меня сабля острая.»	「妻に告げてくれ、私は結婚した、と 私を結婚させたのは素早い弾丸、 私の婚礼を挙げてくれたのは鋭い剣だ、と」
--	--

[Иванов 1953: 123-124]

ここでは、やはり女性の結婚介添え人として、二つの女性名詞で表現される二つの武器、即ち弾丸 пуля と剣 сабля が登場している⁽²⁾。

次の北ロシア、白湖地方の民謡では、前掲の民謡で介添え人として登場していた鋭い剣は「妻」として登場している。

«Ты скажи-тко си, мой конь, Что я женился на другой, Как женила-то миня Цюжа дальня сторона, Повенчала-то миня Да пуля быстрая, А жена-то у миня Да сабля вострая, А постель-то у миня Да мать-сыра земля, А изголовье-то у миня Мурава трава...»	「我が馬よ、告げて欲しい 私は別の妻と結婚した、と 結婚を挙げてくれたのは 遠い異郷、 私に婚礼の冠を被せてくれたのは 素早い弾丸、 私の妻は 鋭い剣 私の新床は 母なる湿れる大地 私の枕は 緑の若草だ、と…」
--	--

[Соколовы 1915: No.609]

次の兵士の歌では、花嫁は剣ではなく、「柩の板」であると明かされ、致命傷を負わせた武器は介添え人や媒酌人として言及される。

Молодой жене ты речью скажи,	若い妻に告げてくれ、
Что женился я на другой жене—гробовой доске,	私は別の妻—柩板と結婚した、と
Засватала меня сабля вострая турецкая,	媒酌人はトルコの鋭い剣
Обвенчала меня пуля свинцовая,	婚礼を挙げてくれたのは鉛の弾丸
Положило спать ядро чугунное.	寝かせてくれたのは鉄の砲弾だ、と

[Соболевский 1895: 469, No.385 (Богатырев 1963: 86)]

2. スロヴァキアの兵士の歌における「死 = 結婚」

同様の表現は他のスラヴ諸民族の兵士の歌に見られる。ただしロシア以外のスラヴ諸民族の兵士の歌では、兵士はふつう独身者で、遺言を伝える相手は、もっぱら母親である。次の民謡「ライン川の彼方」“Za Rajnom, za Rajnom” では対仏戦争に参戦し、死を覚悟したスロヴァキア人兵士の遺言を内容としている。

Odpíšte, odkážte	手紙を書いて伝えてくれ、
Tej mojej materi,	私の母に
Že sa budem ženit'	私は結婚する、
V tej francúzskej zemi.	フランスの地で、と
Francúzski kanóne	フランスの大砲どもが
Budú mi družbové,	私の介添え女たちとなり
Francúzske kartáče	フランスの榴霰弾が
Budú mi družice.	私の男の介添え人たちとなる
Na francúzskej veži	フランスの塔の上に
Zlatý nápis leží:	金の碑銘が打ち付けてある
Tu leží Janičko	「ここにヤニーチコ横たわる
Všecek dorúbaný!	全身切り刻まれて！」と

[Perečko 1955: 232-233 (Богатырев 1963: 86)]

次のやはり対ナポレオン戦争の歌「ボナパルト、ボナパルト」«Bonapart, Bonapart» では、やはりスロヴァキア人の兵士が戦死を結婚として歌う。そこでは妻となるのは爆弾である。

Pardónu nedali,	容赦なく攻め立てられた
Všeckého zrúbali,	満身創痕と成り果てて
Tam leží, chudáčik,	哀れな兵士は横たわる
Všecek dorúbaný!	全身切り傷を受け

Tá francúzška puma,	フランスの爆弾—
To je moja žena,	それが私の妻なのだ
Keď vedľa mňa ľahne,	私の横にそれが横たわる時
Moje líčko zbl'adne.	私の顔は青ざめてゆく

Tie prajzské hubice,	プロシアの大砲ども—
To sú mi družice,	それが私の介添え女たち
Francúzski šaširi,	フランスの銃剣ども—
To sú mi družbové.	それが私の介添え男たち

Tie ruské kanóny,	ロシアの大砲—
To sú moje zvony,	それは私の鐘だ
Ktoré mi vyzvonila	私のために鐘を鳴らしてくれるのだ
V tomto šírom poli.	この広い野原で

[Melicherčík 1959: 546]

3. ウクライナのコサック民謡における「死=結婚」

ウクライナのコサックの歌でも、1、2節の兵士の歌と同じように、闘いに倒れる若者がしばしば描かれる。ポーランド或いはクリミア・タタールとの闘争が日常化していたウクライナのコサックにとって死は身近なものであり、歌にもしばしば歌われた。その場合、1、2節の兵士の歌と同様、しばしば「死=結婚」のアレゴリーが表れる。その場合死にゆくコサックは未婚の若者で、愛馬に母親への遺言を託す。その際に息子は死んだのではない、大地 земля、あるいは墓 могила と結婚した、と告げてくれ、と馬に頼むのが、定型である。この二つの名詞は共に女性名詞で、このアレゴリーを文法的に動機づけている。

次の西ウクライナのコサック歌謡では、ドナウ河畔で打ち破られたコサックが、愛馬に次のように自分の遺言を託す。この場合コサックの花嫁は大地 (земляночка) である。

…Выйде к тебе моя мати,
Буде за мене рытати:
«А де, коню, сын мой девся?
Ци в Дунаю втопился?»—
Скажешь, коню: «Не втопился,
Але, мати, оженився:
Ой взяв себе паняночку.
В серед поля земляночку,
А на личку румяная,
На ней сукня зеленая!

母さんはおまえのもとに出てきて
私について尋ねるだろう
「馬よ、私の息子は何処に行ったんだい?
ドナウ川で溺れたのかい?」 そうしたら
馬よ、言うのだ、「溺れたではありません、
そうではなくて、お母さん、結婚したので
娘を娶ったのです
野原の真ん中で大地を嫁にしたのです
その顔に紅をさし
緑の着物を身にまとった嫁を!」と。

[Головацкий 1878: 100 (=Соколова 1977: 190)]

次のやはり西ウクライナの民謡では、主人公自身が、母親に「お前の息子は墓（могилочка）と結婚した」と告げる。

«Ой цыть, мати, не журися,
Ой вже твой сын оженився,
А взяв себе за женочку,
А середь поля могилочку».

「おお悲しまないで、お母さん、
お前の息子はもう結婚したんだ、
嫁を取ったんだ
その嫁は野原の真ん中の墓なんだ」

[Головацкий 1878: 98 (=Соколова 1977: 190)]

4. ブルガリアのハイドゥクの歌における「死 = 結婚」

ブルガリア・フォークロアにおいては、対トルコ闘争を闘ったハイドゥクや革命家の歌に同様の表現が見出される。次の歌はマケドニアの有名な革命家、ゴーツェ・デルチェフ Гоце Делчев (1872-1903) の死を歌ったものである。ゴーツェ・デルチェフは1903年にセルスコ地方、バニツァ村においてトルコ軍と闘い、戦死した。

«Син ти се, бабо, ожени
За тая Македония,
За тая Сербка Баница,
Църна му земя невеста
Тънка му пушка зълвица

母さん、あなたの息子は結婚しました
マケドニアのため
セルプカ・バニツァのために
黒い大地が彼の花嫁
花嫁の妹は細身の大砲で

Я чиф пищови девер
Църни гарвани сватове».

花嫁の兄弟は二丁の拳銃
黒い鴉どもが媒酌人だ

[Вакарелски 1961: 581 (=Соколова 1977: 191)]

同じゴーツェ・デルチェフの死を歌った次の歌にも同様の表現が見出される。トルコとの闘いに倒れ、死を覚悟したデルチェフは、親兵たちに、もしも母親に出会ったら、自分は黒い土と結婚した、と言ってくれ、と頼む。デルチェフの母親に出会った親兵たちは、「デルチョは何処にいるの?」と問いかける母親に次のように告げる。

—Бабо льо, бабо старичка,
Като на питаш, да кажем:
Делчо го, бабо, оженихме
За една мома църноземка.
Църна му земя постелихме
Бял камън му възглаве кладохме,
Пак го със земя покрихме.—

「年老いたお婆さん
問われるなら答えましょう
私たちはデルチョを一人の黒土の娘と
結婚させました
黒い土の床を敷き
枕に白い石を置き
また土で覆ったのです」⁽³⁾

[Стойкова 1981: 387-388]

ここでも、主人公の花嫁は「黒い大地」църна земяであるが、スラヴ語一般において「大地」は女性名詞であり、一般的に印欧諸語で「大地」を意味する語彙は、女性名詞である。後に見るように、「大地との結婚」のモチーフは、非スラヴ語圏のギリシアの葬礼挽歌やモルドヴァのハイドゥクの歌にも見られる。

次のやはりブルガリアのハイドゥクの歌「ハイドゥクは絞首台に向かう」«Хайдук отива на бесило»では、絞首台が花嫁として表れる。

Что за заводат сеймене,
Водат ма, да ма оженат
За една млада младица:
Тънки конопе кумове,
Орлите ми са сватове
Гарване ми са девере,
Свахите ми са свраките.

私は巡査どもに連れていかれる
結婚させられるのだ
一人の若い若妻と
細い麻縄が教父と教母
鷺たちが私の新しい男の家族
鴉たちが妻の兄弟
カササギたちが私の新しい女の家族⁽⁴⁾

[Богатырев 1963: 87]

5. モルドヴァのハイドゥクの歌における「死 = 結婚」

同様の表現は非スラヴ系のモルドヴァのハイドゥクの歌にも見出される。次の歌ではハイドゥクのコルブを捕らえた君公が、コルブの処刑を婚礼として語る。

Eu singur l-ой кунуна	私は手ずから奴の婚礼を挙げてやる
Ky нэнаша сабия	母の代わりとなるのはサーベル
Ши ку нашу палошу	父の代わりとなるのは両刃の剣
Ky фина скиндурa	花嫁となるのは板だ

L'om ынсура	我らは奴を結婚させてやる
Бн мижлокул кодрулуй	森の中の
Де вырфул копакулуй.	木の梢の下で

Ky трей лемне—а кодрулуй	森の中の三本の横木の下
Де пе малул Олтулуй.	オルタ川の岸から切り出した横木の下で

[Гацак 1960: 88 (Богатырев 1963: 87)]

6. クロアチアの歴史的バラードにおける「死 = 結婚」

同様の表現は、クロアチアの歴史的バラードに見られる。そこではオスマン帝国の常備軍イエニチェリに徴兵される若者が、母親に「私は黒い大地と草と結婚するのだ」と語る。

«Naše majke, vi nas ne plačite,	「我らの母たちよ、我らのために泣くな
Naše seke, vi nas ne žalite,	我らの妹たちよ、我らを悲しむな
Naše drage, vi nas ne čekajte,	愛しい者たちよ、我らを待つな
Ne čekajte, već se razudajte,	待つな、もう結婚してくれ、
Mi ćemo se dolje oženiti	我らは結婚するのだから、
Crnom zemljom i zelenom travom».	黒い大地と緑の草と」

[Путилов 1965: 79 (Микитенко 2020: 186)]

7. スロヴァキアの盗賊の歌における「死=結婚」

ロシアにおけるスロヴァキア・フォークロアの専門家としても知られるピョートル・ボガティリョーフ Пётр Богатырёв (1893-1971) はその著書『スロヴァキアの叙事的物語と叙情的叙事歌謡』(1963) の中で多くのスロヴァキアの盗賊の歌 (Zbojnickie piesni) に、本論で扱っている「死=結婚」のアレゴリーがあらわれることを指摘している。それは上記のバルカン・フォークロアに表れるものと多くの点で共通している。

次に引くのは義賊ユライ・ヤーノシーク Juraj Jánošík (1688-1713) の歌の冒頭である。ヤーノシークは1713年に処刑された義賊であった。

Povedzte tam, povedzte,	そこで告げてくれ、
Tej mojej starej materi,	私の年老いた母に、
Že mi svadba stojí	私の婚礼があると、
Na Kráľovej holi	王の草原で
Stojí, stojí, stojí	そこに立っているのだ、
Smutná, neveselá	悲しい、憂鬱な
Šibenička nová	新しい、削りたての
Z kresaného dreva.	木で作った絞首台が

[Melicherčík 1952: 188 (=Богатырев 1963: 84)]

8. 川との結婚としての「死」

ここまで見てきた「死=結婚」のアレゴリーは、全て男性の死を描いていたが、女性主人公の死もしばしば結婚として表象される。その場合、女性の死はドナウ川への投身自殺として表現されることが多い。これは水名ドナウが、スラヴ全域で男性名詞 Dunaj で表現され、女性のドナウ川への投身自殺は女性とドナウ川との結婚として解釈されうるからである。次のモラヴィア民謡では、父親の命令でトルコ人に嫁がされることになった娘が、それをを嫌った娘が、「トルコ人の嫁になるよりは、ドナウの嫁になります」と父親への遺言を語る。

Ona se skočila,	娘は飛び降り
Vínek s hlavy sňala,	花輪を頭から取り
Na vodu pustila:	川面に投げた

«Plyň, ty můj vinečku,
Ažk mému tatíčku,
A pověz ty jim tam,
Že sem dá vydala
Bystrému Dunaju.
Ty drobné rybičky,
To moje družičky;
Ti velcí kaprové,
To moji družbové;
Vrbina, olšina,
To moja rodina».
Vody dosihala,
Do Dunaja padla.

「私の花輪よ、流れ行け、
私のお父さんのもとまで、
そしてそこで告げて欲しい
私は嫁に行った、と
流れ早いドナウの嫁に
川の小魚たちが
私の介添え娘たち
大きな鯉たちが
私の介添え人たち
柳と榛の木の木立
それが私の家族」
そう言うと水辺に駈けてゆき
ドナウに身を投げた

[Sušil 1951: 136 (=Соколова 1977: 191, Богатырев 1963: 85)]

次のスロヴァキア民謡はチェコのフォークロリスト、イジー・ホラークが引用しているもので、主人公の性別は不明だが、上記のモラヴィア民謡との共通性を考えると、恐らく女性であろう。

Ej, dunajský hnilý klát,
Ej, to bude starý svat,
Dunajské rybičky,
Ej, to budú družičky.

おお、ドナウの朽ちた丸太
それが年老いた私の仲人
ドナウの小魚たち
それが私の介添え娘たち

[Horák 1928 (Богатырев 1963:)]

次のポーランド民謡では、ドナウ川で溺れる若者を描いているが、母親に「私はドナウの水と結婚した」と言ってくれ、と愛馬に頼んでいる。水名ドナウ Dunaj がポーランド語でも男性名詞なので、この歌では女性名詞「水」woda が花嫁に擬せられている。

Nie powiadaj mej matęce,
Żem ja utonął,
Hej, hej, zem ja utonął.

私のお母さんには言わないで
私が溺れたとは、
ヘイ、ヘイ、私が溺れたとは

Ale powiedz, wrony koniu,

そうではなく、黒馬よ、告げてくれ

Žem się ożenił	私は結婚した、と
Hej, hej, žem się ożenił.	ヘイ、ヘイ、私は結婚した、と
Cóż było za ożenienie?	どんな結婚だった？
W wodzie tonienie,	水で溺れたのさ
Hej, hej, w wodzie tonienie.	ヘイ、ヘイ、水で溺れたのさ
Cóż była za panna młoda?	若妻は誰だ？
W dunaju woda,	ドナウの水だ、
Hej,hej, w dunaju woda!	ヘイ、ヘイ、ドナウの水だ

[Przybos' 1959: 118 (Богатырев 1963: 85)]

このモチーフの変形ともいえるのが、海（湖）への身投げによる死を、結婚として表象するものである。次のスロヴァキア民謡「トルコ人の嫁」“Turkova nevesta”では、トルコ人の嫁になるくらいなら、湖に身を投げてこの身を魚の餌食にした方がまし、海の魚たちは自分の婚礼の介添え人なるだろう、と歌う。

Turkova nevesta	トルコ人の花嫁
Než by ja měla byť	私はトルコ人の嫁に
Turkovi nevěstú,	なるよりは、
Rači nech mňa v mori	私は湖の中で
Drobné rybky žerú.	魚たちに食べられた方がまし
Ty morské rybičky,	湖の小魚たちは
To sú mé družičky,	私の婚礼の介添え娘たち
Ti morskí karpové	湖の大きな魚たちは
Sú moji družbové.	私の婚礼の介添え男たち

[Horák 1928: 18 (Богатырев 1963: 84)]

9. ルーマニアのバラード「ミオリツァ」における「死=結婚」

本稿で扱っている「死=結婚」のアレゴリーはバルカンの非スラヴ地域にも見られる。ルーマニアの有名な民衆バラード「ミオリツァ」にそれが典型的に見出される。このバラードでは、

雌子羊ミオリツァが自分の主人の羊飼いが仲間の羊飼いに殺されることになっていることを知り、それを主人に予告する。すると羊飼いは従容として自分の運命を受け入れ、ミオリツァに、おまえは他の羊たちや母親に私は死んだのではなく、王女と結婚した、と告げよ、と頼む。エリアーデは、「ミオリツァ」のヴァシル・アレクサンドリが採録した最も有名なヴァリエントの仏訳を論文「千里眼の雌子羊」[Eliade 1970; エリアーデ 1977] に載せ、その邦訳も読めるので、ここには本稿に直接関係のある部分のみを挙げておく。

Să-i spune curat.	母さんにはしっかり告げてくれ
Că m-am însurat	私は一人の王女と
Cu-o fată de crai,	結婚したのだ、と
Iar la cea măicuță.	けれど母さんには
Să nu spui, drăguță,	言わないで、愛しい子羊よ
Că la nunta mea	私の婚礼の時に
A căzut o stea.	星が落ちたと
Soarele și luna	太陽と月が
Mi-a ținut cununa	私の冠を支えてくれたと
Preoții munții mari,	大きな山々が私の司祭
Păsări lăutari.	鳥たちが私の楽師たちだった、とは

[Fochi 1964: 772 (=Kligman 1988: 242)]

ここでは婚礼の参加者はコスミックな広がりを持っており、婚礼の介添え人として太陽と月さえ登場している。「ミオリツァ」には極めて多くのヴァリエントが知られているが、ここではモルドヴァのヴァリエントを紹介しておく。ここではミオリツァが羊飼いに「あなたが草と大地と結婚したら」という表現で、主人公の死をアレゴリカルに語る。

—Мэй чобане, чобэнаш,	私の羊飼い、羊飼いよ
Оицеле тале—	あなたの羊たちを
Чин'ле-а скоаге ла имаш	誰が牧場に連れていくのですか？
Чине'н кодру ле-а мына	誰が羊たちを囲いに追い込むのですか
Кынд ту те вей ынсуро	あなたが結婚してしまったら
Ку лутул ши ку ярба?	草と大地を嫁にってしまったら？

[Бостан 1985: 97]

このヴァリエーションでは、羊飼いの花嫁は王女ではなく、土 *лут* と草 *ярба* である。このアレゴリーは、むしろ隣接するウクライナや南スラヴに特徴的なものであるが、スラヴ語とは言語系統の異なるロマンス系のモルドヴァ語では、*ярба* は女性名詞だが、*лут* は中性名詞である。ここでは花嫁のアレゴリーに用いられている語彙は、ウクライナ民謡から影響を受けていると考えられる。

10. ブルガリアの聖ゲオルギオス祭のホロの歌にみられる「死=結婚」

ルーマニアのバラード「ミオリツァ」は、ルーマニアの牧畜文化と密接に結びついたフォークロアだが、次に紹介するのは、筆者が1982年に南ブルガリアのノヴァコヴォ村で採録したホロ（輪舞）の歌である。これは4月23日の聖ゲオルギオス祭（*Гергьовден*）に歌われていたもので、やはりブルガリアの牧畜文化と密接に結びついている。この歌では聖ゲオルギオスが羊飼いとして登場し、自分の飼っている羊に「日曜日は私の婚礼の日だ、明日私はおまえを屠る」と告げる。すると羊は「私を殺さないで、私はあなたの羊の群れを率いてドナウ川を渡ったではありませんか」と呼びかける。

Замамил Гьорги стадото	ゲオルギは羊の群れを
На вода, Гьорги, на сянка,	水辺へ、木陰へと誘う
И на бял камък поседна,	そして白い石に腰掛け
И с меден си кавал засвири,	甘い音色のカヴァルを吹く
Кавал му свири, говори:	カヴァルを吹いて話しかける—
«Овенчо, вакъл овенчо,	「子羊よ、目の周りに黒いぶちのある子羊よ
Ти сещаш ли се, овенчо,	いいか、聞いてくれ、子羊よ
Неделя сватба ще правя,	日曜日には私は結婚をする
Тебе за сватба ще коля,	婚礼のためにおまえを屠ろう
Тебе за сватба ще коля,	婚礼のためにおまえを屠ろう
Сватбата да ми изпратиш».	おまえは私に婚礼を贈ってくれる」
Овенчо Гьорги думаше:	すると子羊はゲオルギに言う—
«Немой ма коли Гьорги ле,	「私を殺さないで、ゲオルギオス、
Знаеш ли, Гьорге, помниш ли,	ねえ、ゲオルギオス、覚えていますか？
Кога Дунава придойде,	ドナウの水が増した時
А ти стадото приведох	私があなたの群れを導いて
През мътна буйна Дунава,	濁って逆巻くドナウ河を渡ったら
А ти ми, Гьорге, продума:	あなたは、ゲオルギオスよ、私にこう言いました

“Краката да ти посребря,
Рогага ще ти позлагя”»

『おまえの足を銀で飾り
おまえの角を金で飾ってやろう』と」

この歌では、ルーマニアの「ミオリツァ」と同様、羊飼いと羊が登場するが、「ミオリツァ」とは逆に、羊を殺そうとする羊飼いに、羊飼いが「私を殺さないで」と訴える内容となっている。しかし聖ゲオルギオス祭が聖ゲオルギオスの殉教の日であり、この日が結婚にまつわる習俗と密接に関わっていること、この日にブルガリアの民間では犠牲として当歳の子羊を屠ること、福音書においてイエス・キリストが「過越の子羊」として表象されていることなどを考え合わせると、聖ゲオルギオスが自分の婚礼のために屠らんとしている子羊は聖ゲオルギオス自身である、と考えられる [伊東 1988]。しかも境界を越える「川渡り」のモチーフが、スラヴ・フォークロアに普遍的な結婚のメタフォアであること⁽⁵⁾、水名ドナウが、本稿で多くの例を見てきたように、スラヴ・フォークロアにおいてしばしば「死 = 結婚」のアレゴリーとともに表れることを考え合わせると⁽⁶⁾、ここに紹介したブルガリア民謡のテキストも、本稿で検討している「死 = 結婚」のモチーフを共有している、と考えられるのである。

11. 「死 = 結婚」のアレゴリーと婚礼を模する葬儀

本稿で検討している「死 = 結婚」のアレゴリーと密接に関連している、と思われるのが、独身の若者が死亡した場合にその葬儀を婚礼を模して行う習俗である。これは、カルパチアからバルカン地域にかけて、スラヴ諸民族（特にカルパチア・ウクライナと南スラヴに特徴的である）のみならず、ルーマニアやギリシアの非スラヴ系のバルカン民族にも知られている。

そもそもスラヴ・東欧においては、未婚の死者は「よくない死者」とみなされ、死後この世に悪影響を及ぼす、と考えられた。未婚の死者がこの「よくない死者」となることを回避することが、この婚礼に擬えた葬儀を行う最大の民俗学的動機である。そもそもスラヴ・東欧の民俗的観念によれば、人は誕生と死の間に洗礼と結婚という二つの段階を必ず踏まねばならず、死を迎える前にそのいずれが欠けていても、よくない死者となる、とみなされた。東スラヴで、溺死した女性のみならず、洗礼を受ける前に死んだ幼児もルサルカとなる、と考えられたのは、そのためである。

この葬儀は、具体的には死者に死に装束ではなく婚礼衣装を着せる、頭に婚礼の冠を被せる、葬儀の当事者たちを婚礼の中での役割の名で呼ぶ、葬儀の場で婚礼の歌を歌う、といった形式で行われる。北ロシアでは、実際に未婚の娘が亡くなった場合に、彼女に婚礼衣装を着せて葬る慣習があった。自分の未婚の娘を先になくした泣き女フェドソーワの泣き歌には死を結婚に擬えるアレゴリーは見られないものの、泣き歌の中でフェドソーワは自分の娘を、婚礼歌で花嫁を象徴する「白鳥」の名で呼び、実際に葬儀で娘に着せた婚礼衣装の詳細な描写をしている [中堀

2010: 252-3, 268; Барсов 1997: 285 (№ 8)]. スラヴ諸民族に広く見出されるこの慣習についてはヴィノグラードワがまとめているが [Виноградова 2009]、ルーマニアの事例についてはクリングマンがモノグラフを上梓しており [Kligman 1988]、ダンフォースも現代ギリシア農村における葬礼についてのモノグラフ [Danforth 1982] で、同様の結婚葬の例を報告している。ダンフォースは次のような具体的な事例を報告している。

タナシスというギリシア出身の若者は米国に7年住み、働いていた。結婚を間近に控えていた彼は、7年間故郷に帰らなかったが、重い腰を上げ、ギリシアに戻った。ところが空港に着くと、彼はすぐにその場で拘束され、強制的に軍隊に入隊させられてしまった。3ヶ月後に彼が運転していたトラックが道を外れ、横転した。タナシスは頭蓋骨骨折で即死した。タナシスが家に帰って来たのは死後数日が経ってからだった。家で一晚母親と家族はタナシスと過ごし、翌日葬儀埋葬が行われたが、その葬儀は婚礼のようにとり行われた。白い婚礼の冠が頭に被せられ、婚礼の泣き歌の代わりに婚礼歌が歌われた。

このような婚礼を模した葬儀で歌われる泣き歌では、当事者が男性の場合、ブルガリアやウクライナなどと同じように、死は故人と大地との結婚として表象される場合が少なくない。次にあげるのはダンフォースの採録したそのような泣き歌の一つである。

Ἐσεῖς παιδιά μ' βλαχόιπουλα, ἐσεῖς παιδιά καημένα,
ταχιά θά πᾶτε στο χωριό, στην ἔρημη πατρίδα.
Τουφέκια νά μὴ ρίξετε, τραγούδια νά μὴν πῆτε,
νά μὴ σᾶς ἀκούσ' τ' ἀδέρφια μ' κ' ἡ δόλια ἡ ἀδερχή μ',
νά μὴ σᾶς ἀκούσ' ἡ ἀγάπη μ', τὰ δόλια μου τὰ ἴγγονια.
Μὴν πῆτε πὼς σκοτώθηκα, πὼς εἶμαι σκοτωμένος.
Μόν' πῆτε πὼς παντρεύτηκα καὶ πῆρα καλὴ γυναίκα.
Πῆρα τὴν πλάκα πεθερά, τὴ μαύρη γῆς γυναίκα,
κι αὐτὰ τὰ λιανοπέτραδα τὰ ἴχω γυναικαδέρφια.

若い羊飼いや、不幸な若者よ
明日おまえは私たちの村に戻って来る、私たちの寂れた故郷に
おまえは銃を撃つな、歌も歌うな
不幸な私の兄弟姉妹におまえの声を聞かせるな
私の妻や、私の哀れな孫たちにおまえの声を聞かせるな
彼らに私が亡くなったとは言うな、彼らに私が死んだとは言うな
彼らには言ってくれ、私は結婚し、良い妻を娶ったのだ、と

私は墓石を私の義母とした、黒い大地を私の妻とした
そして小石を義理の兄弟姉妹としたのだ、と

[Danforth 1982: 80-81]

12. アレゴリー「死 = 結婚」の起源と機能

以上スラヴ = バルカン地域のフォークロアに表れる「死 = 結婚」という我々現代人にとっては逆説的なアレゴリーの様々な表現を見てきたが、その起源については、いくつかの可能性が考えられる。まず、「死」を当事者自身の個体の死として考えるなら、それは終末以外の何物でもないが、集団で営まれる民衆生活においては、人間が通過すべき生の結節点として結婚と等価である、という観念が根底にあったと思われる⁽⁷⁾。この意味で婚礼と葬儀は等価の通過儀礼とみなされる。

既に述べたように、スラヴ・東欧の伝統的な世界観において、誕生、洗礼、結婚、死の4つが、人が順番に通過すべき4つの段階であった。このため結婚は死と等価とみなされるだけでなく、結婚を経ないで亡くなることは、よくないことであり、「よくない死者」を生み出すことになる、とみなされた。それを回避するために前節で紹介したような「結婚葬」がこの地域では広く営まれ、それに結びついた葬礼フォークロアにおける詩的表現として、このアレゴリーは現れたと思われる。フォークロアで結婚として表象される死がもっぱら独身者の死であることは、そのためである、と考えられる。既婚者の死が歌われるロシアの例は、本稿に挙げた例の中ではむしろ例外的である。

詩的表現としては、この「死 = 結婚」というアレゴリーは、死に言及することを避ける婉曲語法としても機能しており、悲劇的事実を喜ばしい出来事で置き換えることは、独特の効果をもたらす。ボガティリョーフは、このアレゴリーは意表を突く対比の手法である、としている [Богатырев 1963: 88]。

このアレゴリーの具体的な表現においては、妻や介添え人などに、様々な事物や動植物が登場するが、何が何に擬えられるかは、歌われるジャンルやシチュエーション、そして歌われる言語によって様々である。その際、それらの事物や動植物の文法的性別が象徴的意味を持つことになる。主人公が結婚する「花嫁」に言語系統を越えて「大地、土」が登場するのは、印欧語族においてこの語が殆どの場合女性名詞で表現されるからであろう。こうして本稿で検討してきたこのアレゴリーは、極めて普遍的な文化人類学的な動機と、極めて具体的な言語的ディテールによって支えられていることが分かるのである。

注

(1) 民謡「黒い鴉」は、ソ連時代には、アレクサンドロフ歌と踊りのアンサンブルとバス歌手アルトゥール・エイゼン Артур Эйзен (1927-2008)、民謡歌手ジャンナ・ビチェフスカヤ Жанна Бичевская (1944-)、最近

スラヴ=バルカン・フォークロアにおけるアレゴリー「死=結婚」

では、来日ロシア人歌手エカテリーナ Екатерина などの演唱によって知られる。

- (2) 民謡「おお我が草原よ」は、ソ連時代、バス歌手マクシム・ミハイロフ Максим Михайлов (1893-1971) の演唱によって知られた。
- (3) ゴーツェ・デルチェフの死を結婚として表象するマケドニアの民衆バラードについては [Вражиновски 1984] 参照。
- (4) この詩行はピーテル・ブリューゲル1568年作の絵画「絞首台の上のかささぎ」を想起させる。
- (5) スラヴ民謡における「川渡り」の象徴的な意味については、[伊東 2001] [Sololova. 1978] を参照のこと。ヤナーチェクがその歌詞を用いて1885年に無伴奏男声合唱曲を作曲したモラヴィア民謡「渡し場で」“Na prievoze” は、渡し守に払う金がなかったために、川向こうで死んだ恋人のもとに行くことができなかった娘の物語である。
- (6) スラヴ・フォークロア一般に現れる水名ドナウの問題については [伊東 1994] を参照のこと。
- (7) 死後の世界における、個体の新たな生の存続を信じる世界観において、結婚と死は通過儀礼としてより大きな共通性を持つであろう。エリアーデが指摘するように聖アウグスティヌスが、イエス・キリストの十字架上の死を、「結婚」と表現したことは、本稿で扱ったアレゴリー「死=結婚」と多くの共通点を持つ ([エリアーデ 1977])。

文献

- 伊東一郎「聖ゲオルギオスの変容—ブルガリアの伝承と儀礼より」// 青木保・黒田悦子編『儀礼—文化と形式的行動』東京大学出版会。1988。
- 伊東一郎「スラヴ・フォークロアにおけるドナウ」// 伊東一郎他『ヨーロッパ統合とドナウ沿岸諸国』早稲田大学坂田正顕研究室。1994。
- 伊東一郎「マーシャは川を渡れない」// 伊東一郎『マーシャは川を渡れない』東洋書店。2001。
- 中堀正洋『ロシア民衆挽歌—セーヴェルの葬礼泣き歌』成文社。2010。
- Барсов, Е. В. Причитанья Северного края, собранные Е. В. Барсовым. Т. I. Издание подготовили Б. Е. Чистова и К. В. Чистов. Санкт-Петербург. 1997.
- Богатырев, П. Словацкие эпические рассказы и лиро-эпические песни. Москва. 1963.
- Богатырёв, П. (ред.) Эпос славянских народов. Москва. 1959.
- Бостан, Г. Типологическое соотношение и взаимосвязи молдавского, русского и украинского фольклора. Кишинев. 1985.
- Вакарелски, Хр. (отбр и ред.) Исторически песни. София. 1961.
- Виноградова, Л. Похороны-свадьба. //Славянские древности. Т. 4. 2009.
- Вражиновски, Т. Мотивот смрт-свадба во баладите и преданијата за смртта на Гоце Делчев. //Македонски фолклор. Год. 17. Бр. 33. 1984.
- Гацак, В. Молдавские и румынские эпические песни о гайдуках и некоторые вопросы их соотношения с южнославянскими. Канд. Дисс. Москва. 1960.
- Головацкий, Я. Народные песни Галицкой и Угорской Руси, собранные Я. Ф. Головацким. Ч. I. Думы и думки. Москва. 1878.
- Гусев. В. (ред.) Песни русских поэтов, I-II. Ленинград. 1988.
- Еремина, В. Ритуал и фольклор. Ленинград. 1991.
- Иванов, Аз. Русские народные песни. I. 1953.
- Микитенко, О. Украинские «сумне весілля» и его сербские параллели. //Код словенских культур. 3. 1998.
- Микитенко, О. Балканослов'янський текст поховального оплакування: Прагматика, семантика, етнопоетика. Київ. 2010.

- Путилов, Б. Славянская историческая баллада. Ленинград. 1965.
- Соболевский, А. Великорусские народные песни. Т. I. Санкт-Петербург. 1895.
- Соколова, В. Об историко-этнографическом значении народной поэтической образности: Образ «свадьбы-смерти» в славянском фольклоре. //Фольклор и этнография. Ленинград. 1977.
- Соколовы, Б. и Ю. Сказки и песни Белозерского края. Москва. 1915.
- Стойкова, С. (съст. и ред.) Българска народна поезия и проза. Т. 3. Хайдушки и исторични песни. София. 1981.
- Brtaň, R., Gašparíková, V. Perečko belavé, červený dolomán. Sborník zbojníckej a vojenskej ľudovej poézie. Praha. 1955.
- Danforth, L. M. The Death Rituals of Rural Greece. Princeton University Press, Princeton. 1982.
- Eliade, M. L'agnelle voyante. //Eliade, M. De Zarmoxid a Gengis-khan. Paris. 1970.
- エリアーデ、M. 「千里眼の雌子羊」林隆訳 // 『エリアーデ著作集12 ザルモクシスからジンギスカンまで②』せりか書房。1977。
- Fochi, A. Miorița. București. 1964.
- Horák, J. Poznámky všeobecné o ľudovej epike slovenskej. //Výber slovenskej poézie ľudovej. I. Piesne epickej. Turč. Sv. Martin. 1928.
- Kligman, G. The Wedding of the Dead. Ritual, poetics, and popular culture in the Transylvania. University of California Press, London. 1988.
- Melicherčík, A. Jánošíkovská tradícia na Slovensku. Bratislava. 1952.
- Melicherčík, A. Slovenský folklór. Chrestomatia. 1959.
- Muşlea, J. La mort-mariage—une particularité du folklore balkanique (=Mélanges de l'Ecole Roumaine en France) Paris. 1925.
- Przybos, J. Jabłończka. Antologia polskie pieśni ludowej. Wyd. 3. Warszawa. 1959.
- Sokolova, V. Traditional Symbols in Slavonic Folk Poetry. //Dundes, A. (ed.). Varia Folklorica. The Hague-Paris. 1978.
- Sušil, F. Moravské národní písní. IV vyd. Praha. 1951.